２０２３ 年度Ⅱ期 個人企画

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	Ｎ・Ｈ	デュッセルドルフ大学	ドイツ	2024/3/20～2024/3/25

令和５年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科　　３　年	学籍番号：********	氏名：N・H

渡航先国：ドイツ
受入機関名：Dusseldorf 大学附属病院、Neuro-Centrum Dusseldorf、 St. Mauritius Therapieklinik
渡航先機関での受入機関： 令和　６年　３月　20 日　～　令和　６年　３月　25 日　（　６日間　）

1　スケジュール

3 月 18 日　関西国際空港発

3 月 19 日　シンガポール・チャンギ国際空港/ドイツ・フランクフルト国際空港経由

ドイツ・デゥッセルドルフ国際空港到着

3 月 20 日　Dusseldorf 大学付属病院　訪問

3 月 21 日　Neuro-Centrum Dusseldorf 訪問

3 月 22 日　St. Mauritius Therapieklinik 訪問

週末の 3 月 23 日~3 月 24 日については、近隣の観光

3 月 25 日　ドイツ研修での総括

3 月 26 日　ドイツ・デゥッセルドルフ国際空港発

ドイツ・フランクフルト国際空港経由

3 月 27 日　シンガポール・チャンギ国際空港経由

関西国際空港到着

２　目的

EU 諸国における医療の情勢の調査を目的とし、大阪大学と MOU を締結している、ドイツ・デュッセルドルフ大学神経内科、運動神経病センターを訪問して、同国の診療・研究環境の見学、現地医療スタッフへのヒアリングを行い、本邦と欧州の国際比較を行い、本邦での診療に活用しうる実施体制に考察を加えるとともに、課題の抽出及び本邦との比較を行い、いかにして双方の課題を解決するか考察することを、目的とした。

３　内容

3-1 デュッセルドルフ大学付属病院

デュッセルドルフ大学付属病院では、神経内科の病棟を含む施設の見学、脳神経外科による手術見学、ER 施設の見学を主に行った。神経内科施設では病棟及び研究施設では、日本と大きな差があるようには感じなかったが、診察を行う部屋に大きな違いを感じた。ヒアリングで得た情報であるが、ドイツには日本とは違い医局の部屋というものが存在しない。患者のプライバシーを第一に考えるため、診察中の会話が他の患者には聞こえないように、確実に診察中の部屋が閉鎖されているようにされているという。脳神経外科の手術では DBS の電池交換術を見学した。手術に関わっているスタッフが全員女性だったことも、印象的であった。ER では大学病院で受け入れ先がない急患を全て受け入れるということで、市内の救急情報が全てモニタリングできるようになっており、受け入れ準備をスムーズに行えるなど、救急施設の日本との差を感じた。

3-2 Neuro-Centrum Dusseldorf

Neuro-Centrum Dusseldorf では施設見学と実際に神経内科医による患者の診察を見学した。神経疾患を中心的に扱うクリニックを訪問したが、整形外科なども施設内にあり、各科の連携が密にとれるよう考慮されている。ここにて抽出できた課題はプライベート保険という制度だ。ドイツには強制保険とプライベート保険と二種類存在する。プライベート保険では診察等の優先権に加え、高額の治療費を必要とする医療行為や未承認の治療なども可能になる。それによって医療の不平等が生まれてしまうのが、現状のドイツでの課題として感じた。

3-3 St. Mauritius Therapieklinik

St. Mauritius Therapieklinik では患者と接触することができず、実際の治療シーンなどを見学することができなかったが、携わっている医療スタッフへのヒアリングを実施した。施設に勤務している神経内科医、外科医、音楽療法士、言語聴覚士から、ヒアリングすることができた。その中でも日本で聞いたことのなかった音楽療法士だが、主に治療としては子供のリハビリ患者を対象とし、いろいろな楽器を実際に演奏してみることで脳の活性化を促すというのは面白いと思った。また、施設の構造が分岐が多い構造になっており、壁にかかっている絵や壁の色などを覚えていないと目的地に辿り着けないようになっており、これも脳の活性化を促すようになっているという。施設を建築する段階から患者に対しての効果が組み込まれている点は、日本にはあまりない柔軟な考えだと感じた。

4　今後の抱負

今回は海外の医療現場を見る初めての機会となったとともに、欧州にも初めて訪問した。日本にいるだけでは思ったこともなかった、医療技術や医療施設の進歩の差を感じ、また日本とは医療に対しての考え方の違いも感じた。将来的に日本に取り入れることができれば、医療関係者の労働環境改善につながるものを多く見られた。医師になったあとには積極的に海外に赴き、日本にないものを海外から、また日本にしかないものを海外に広めていくことができる国際的な医師になりたいと改めて感じた。また初めて１人でヨーロッパに行き、１週間生活したのは貴重な経験だった。自分自身が思っているよりも海外の方とのコミュニケーションができ、自分自身に自信がついた。これからも医学、外国語に精進しつつ、５年、６年時には積極的に海外実習に参加したいと思う。

5　謝辞

今回の実習にあたって、奨学金の援助をしていただいた岸本忠三先生、受け入れ交渉と同行してくださった森口悠先生、受け入れてくださった Stefan Jun Groiß 先生、諸手続きをしてくださった医学科教務の方々、基礎研究室配属からお世話になった国際未来医療学講座の方々、本実習に携わっていただいた全ての方に感謝申し上げます。今回の大変貴重な経験を活かし、一歩ずつ医師への道を精進してまいります。